続 徒然つれづれ No. 304

サッカーに変心

桑野　巍

何が起こっても不思議ではない―という時代が通り過ぎていく。今年も内外で自然災害を含め大きな事件、事故が発生した。では来年はどこで、どんな事が起こるのか―これは予言者でもわからない。まして凡人には予想もできない、だから不謹慎だが面白い。ただ時の流れの中で起こる痛ましい事件や事故はもう真っ平ご免だ。平穏を祈りたい。

人間社会も変革期なら自然現象も変容期のようだし、自分なりに一つひとつの現象を取り上げ、問題の底流を探ってみようという意欲も湧いてこない。達観しているつもりはないが、楽しみにしていたプロ野球公式戦が終わって、何となく空虚感が漂っている。そんな時、在京の愚息から「おうおやじ、サッカーを見に来ないか」との誘いが舞い込んだ。

東京・調布市にある味の素スタジアムの切符をすでに買ってあるし、親が泊まるホテルも予約しておいたというのだ。試合はＪ１のＦＣ東京とサンフレッチェ広島戦だ。Ｊ１なら大阪・長居や万博競技場で観戦できるので何もわざわざ東京に行かなくても、と思ったが、折角の“孝行”息子の企画に乗った。

愚息の家族と東京駅で落ち合い、新宿でめいめいが自分の好きな弁当を仕入れて、京王線に乗り「飛田給」という駅で降りた。駅から歩いて５、６分、大きな天然芝のサッカー場があった。甲子園と違うな、と思って試合開始前の練習風景やサポーターが陣取る応援席に目をやっていたら、小学校５年生の孫が「甲子園と比べてみたら」とひやかし気味にいう。たしかに雰囲気が違う。口笛の音色や歌、旗の振り方、動作、拍手が異なる。

ＦＣ東京の応援席に比べて広島の方は密度が薄く、同情したくなった。広島がアウェイだからかさびしい。Ｊ１やＪ２のサッカーチームは必ず都市名を付けることになっているので何となく親しみを与えてくれるが、背後には応援企業がいることもよくわかった。それとボール供給をする地元のサッカー部の高校生ボランティアのきびきびしたアシストも目についた。

試合が始まった。一つのボールを追いかけ互いにゴールを狙うが、なんと選手の機敏なこと、どの選手も懸命に走る。ぼーっとした選手はいない。シュートし、ゴールが決まれば観客は総立ちで大歓声の渦だ。たとえシュートがはずれても、サポーターは惜しみなく拍手を送る。野球のように四死球がないのでブーイングは起こらない。前半45分、後半45分の熱闘は一瞬たりとも目が離せない。いまさらながら世界各国でサッカー熱が高いことがよくわかった。

前半が終わったところで私が「オフサイドがよくわからんが、サッカーも面白いな」と言ったら、愚息は「サッカーを国技にしている国が多いのもわかっただろう」と言い、「Ｊ１チームのある監督は観客に対して、もしうちのチームで怠慢なプレイをする選手がいたら、遠慮なく教えてほしい、といったそうだよ」と続けた。試合は結局２－２で引き分けに終わった。

もう一つ言っておきたい、と解説者ぶって愚息がつけ加えた。それはサッカーファンのマナーのことだ。お気に入りチームの席に陣取るサポーターや一般観客席で出るごみは自分自身が処理し、指定のごみ箱に入れること。だから試合が終わっても観客席はきれいだ、と言い「甲子園などの野球場の観客席と比べてみたら。サッカーファンの方が行儀がいい」と自惚れた。

サッカーチームの監督もベンチも選手も闘争心を燃やし、使命感を持ち、耐久、持久力を持ち続けているなという余韻を感じながら、弁当などのごみを捨てて競技場をあとにした。帰り道を急いで、ほぼ満員の電車の中で頭の片隅を去来したのはやはりプロ野球との比較だった。プロ野球界は今年を改革元年と位置づけたが、変わったのはセ・パの交流戦が実現したくらいで遅々として進んでいない。

プロ野球の場合、オーナーなど経営側と選手側の甘えや甘やかしが顕著だし、テレビをはじめメディアやメディアに登場する解説者にも厳しさが不足していて、いずれ客離れが起こるのではないか、との懸念が先立つ。50年以上のプロ野球ファンもＪリーグを観戦してやや変心、来年のＷ杯を楽しみにしている。

（自治大阪編集委員会顧問
時事通信社元大阪支社長）